

ある日、森の奥で

ミキカイム

暗い暗い森の奥。

生い茂った木々が空を覆い、陽の光を遮っているために、昼間だというのに薄暗い。近くに住む人にも「迷いの森」として恐れられている場所に相応しい趣だった。

そんな森の中の倒れた巨木に腰を掛けて休息をとる人の姿があった。手には小刀を持ち、鼻歌交じりに木の枝を削っている。

その足元には大きな体躯の狼が地面にうつ伏せになって眠っている。

シュッ、シュッと小気味よく削られた木の屑が、眠る狼の背に降りかかってくる。長い灰色の毛の背中には点々と木の屑が散らばっていた。

それを気に掛ける様子もなかった狼だったが、さすがに木の屑が顔に差し掛かると反応を示した。ぴんと立った三角の耳をしきりに動かし、太い前足を器用に使い顔にかかった木の屑を払い落とす。

しかしそんなことも何のその、木の削る音は止む気配がない。狼はすくっと立ち上がり、その場で体をぶるぶると震わせだした。積もり積もった木の屑は四方へ飛び散った。すっきりした狼は再び地面へうつ伏せになる。尻尾がかすかに左右に揺れている。身体がすっきりし、ご機嫌になったようだ。

再び身体を休めていたが、その安眠はすぐに妨害された。ぱらり、ぱらりと木の屑が顔に掛かる。しかも先ほどよりも確実に削る速度が上がっている。鼻歌もそれに比例するようにテンポが速くなっている。

狼は片方の赤い瞳で音の方を睨みつける。しかし、木を削ることに夢中になっているためか、全く効果が無い。狼はすくっと立ち上がり、鼻先を足へと押しつけた。木を削る音は止まない。

今度は太い右前足を膝に押し当てた。ちょうど、立ち上がってお手をしている状態だ。この無言の抗議に気が付かないはずはないはずだが、音は一向にやむ気配がない。それどころか、顔が近くなっただけ不快感が飛躍的に上昇した。

狼は右前足を地面へ戻し、実力行使に出た。器用に小刀を手から奪い、口にくわえる。そしてそのまま、小刀を遠くへと放り投げた。きれいな放物線を描き小刀は茂みの奥へと消えていった。

「ふう、やれやれ」と言わんばかりに鼻から息をひとつつき、身体を震わせて木の屑を落とし、満足そうに狼は再び地面へ横になった。

面白くないのは小刀を奪われた当人だ。せっかくの楽しみを取り上げられては黙ってられない。そこで、それまで削っていた木の枝を狼めがけて投げつけた。もちろん、尖っている方を狼に向けて。

狼は突然迫った身の危険を察知し、投げつけられた瞬間に立ち上がり、その場からジャンプして離れた。むなしく空を切った木の枝は、狼がいたはずの地面へきれいに刺さって動きを止めた。間一髪である。

「避けるな」

理不尽な物言いに狼が牙をむこうとした。しかし、それは制された。口元に人差し指を当てて

いる。静かにしろという合図だ。

高く伸びた木の幹を眺め、にんまりと口角を引き上げた。

「久々のお客さんだよ」

その言葉に狼もまるで人間のようににんまりと笑みを浮かべた。